



TITLE:

西[遊]夢録(二十)

AUTHOR(S):

瀧川, 規一

---

CITATION:

瀧川, 規一. 西[遊]夢録(二十). 地球 1929, 11(5): 369-373

ISSUE DATE:

1929-05-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183597>

RIGHT:

# 西遊夢錄

(二十)

## 瀧川規一

【蘇國高地の湖水と湖上の美人】 蘇國高地の湖水カトリン (Katherine) アックハイ (Achray) 及びベンナカ (Venachar) の三湖を繞る地方を總稱してトロサツクス (Trosachs 又は Trosachs) と稱せられて居る。綴字が示す如くトロサツクスは常に複雜の形をとり山岳兀突たる地方の義である。カトリン湖上の一小島上に世を避けて住居を老父母と共になせる若く美しきエレンが蘇國高地の豪族ロデリック・デニ (Roderick Dhu) の怪腕に奪ひ取らるゝか、或はフィッツ・セームスと假に稱するセームス王によつて救ひ出され、婚約あるグレム (Grane) の手に歸るかば文豪スコットの史詩『湖上の美人』 (Lady of the Lake) を讀む者が詩の麗句美辭に酔ひながら巻を終るまで懸念の糸につられるのである。

トロサツクス・ホテルには夏季旅行の季節として各國の美人が居る。詩を讀んで腦裡に描いた理想の美人とは抑も如何なるものであるか。詩に用ゐてゐるエレンの形容詩は常に Fair である。希臘の彫刻にあるニンフ (Nymph) もナイアド (Naiad) もまたグレース (Grace) もエレン以上の麗はしさなもたないと言ふ。娘エレンは兩頬微に日焼けの色を帯びて胸のあたりの白さと膨ふかさとを見せてゐる。足輕く歩確に

て言葉には山の詠を帶び聲音は銀響の柔かさをもち息の蕤に若き異性を惹きつける。身に纏ふに紺色の肩掛けをもつて漆黒の光澤に輝く房々とした頭髮を結ぶに緇子のリボンと黄金のブローチをもつてし感激性に富んだ黒き眸は或は悦びに踊り噴きて憂の色を見せ親切なる心をあらはし一面に女性ながらも北族の威嚴を見せてゐると云ふ。こんなのが幾多の美人旅客中に見出されるであらうか。主觀的でなくて客觀的に見て、また飢えた虎狼の眼をもつて見るのでなくて、冷靜なる飽滿の眼を以て見る時果して幾人の美人を發見するであらうか。文豪スコットの美人の標準と東洋人の美人の標準とは勿論一致しないであらう。伊太利カンパニアの美人とエスキモの美人とは全く性質を異にしてゐるに相異なからうが何れも異性の歎美者をもつてゐる筈だ。

『湖上の美人を標準としての美人の分類』 白人の物識りは云ふ。美人に關して數を乞はんと欲するならば詩人の許に行け、然らずんば畫家に聞け、この兩者にして不可なれば美妻君を得ずして失望せる既婚者の云ふ處に耳を傾けよと云つてゐる。沙翁の戯曲にあらはれたる諸種の美人型を捉へて論議をなす研究者は數多くあるが、沙翁自らも云へるが如く『婦

徳の種類は多くその一にても可なるが如く、幾多の種類の人には皆嫌はず』と云ふが如き度量海大にして百川を飲むが如き美人論は漢として捕捉し難い。

吾が邦に於ても京美人越後美人と云ふが如く歐洲に於て美人型として云はれるものにブルネット (Brunette) 型と云ふのがある。ブルネット美人と云へば頭髮の色に黒味を帶び、眼眸には不思議の陰と光とまた深さとを兼ね備へ背丈けすらりと高く、軽く太陽から接吻を受けたと云はんばかりに頬と頸とは淡く褐色を帶び、不器用さうな可愛い手つきをしてゐる美人がそれである。ブロンド (Blonde) の美人と云ふのがその對照となつて居る。髮髪の色に黄金を漂はし眼眸には碧空の自然な想はしめ、體軀短小であつてその双の手は見る目を恍惚たらしめる程に白くして優しいと云つたやうなのがブロンド型の美人である。

ブラック・ボーティ (Black Beauty) と云ふのがある。有名な動物物語にある馬にもブラック・ボーティと云ふのがあるから馬のことだと心得てはいけない。人間様の美人である。形容詩の暗示するが如く黒人美人である。黒人の黒さにも種々濃淡の區別がある。後日のことであるが米國のハワード大學 (Howard University) の女子大學生と交談したことがあつた。この大學は黒人によつて經營され總長も黒人、男女の大學生悉く黒人である。交談時餘黒人の娘にも魅力があり愛嬌があることを悟つた。エスキモの婦人スクオ (Squaw) にも異性の歎美者 (Admiree) があると等しく黒人にも

異性の歎美者があつて然る可きである。漆器の調度品を鑑賞しモーニング、フロック禮装の黒さを尊重する心地さへあれば黒美人の美を認め得るに難くない筈である。

鉛色美人、銅色美人と云ふのがある。白人國に於て屢見る極東美人がこの型に屬するのではないか。以上美人の種類別に對して、湖上の美人エレンは何れに屬するか。ブロンドなりやブルネットなりや。

同じく山國の美人とは云へ瑞西の美人は蘇國の美人とは趣を異にし、黒眸黒髮であつてもウエールスのスノードン (Snowdon) の娘とも趣を異にする。伊國の美人、西班牙の美人、佛蘭西の美人、獨乙の美人、埃及美人、土其古美人、支那美人、極東美人、何れもとどりに特種の魅力の持主であることを悟る日に今更ながら沙翁の偉大性を感じざるを得ない。

【山間の草花】山と山との間に湖面を見ることが既に快感を與へる。山岳豁谷が詩の背景を作り幾多の大小の湖水、湖水より流れ出づる谿流、谿流を挿む草原矮林が悉くスコットの詩の材料となつて居る。山岳豁谷をあらはす dale, glen, dingle, cavern, rock, mountain, meadow, moor, heath, loch, 等の平凡なる語が詩によつて生命を賦與せられて居る。詩そのものは既に幾多の邦譯があつて一部の讀書子には先刻御承知と云はんばかりのものである。ホテルを出て、逆にカランダまで悠閑の一日を費した。普通旅客はカランダより入つてホテルに來る。それが爲めにアーバフォイルの山村の情

趣と山村からの山越しの景觀を割愛する。隨を得て蜀なのぞむやうではあるが、二泊の目的はカランダまでの逆往復を最初から計算に入れてあつたからである。詩に謂ふ處の西の空に傾く日の光を受けて波なす雲が谿谷の上を流れるのを見、燧石の如き堅さを見せた紫の峰の尖頭を仰ぎその下に潜む暗黒の谿谷を目前に見たいのが希望の一であつた。更にトロサックスの名と共に詩が腦裏に映ぜしめた夢の仙郷に花咲き繁る草花は果して如何なるものであるかを實見したさがこの一日の閑遊を計畫した最大原因であつた。詩に用ゐられた草木の名 hawthorn, hazel, aspen, ash, oak, pine-tree, birch, ivy, は樹枝の青緑に連想を作り eglantine, primrose, violet fox-glove, night-shade, rose, 等は花の色を連想せしめる馬までが間歩をなして旅客の心を知り顔である。馭者を相手に草花の名を尋ね聳える山々の名を聞き山角、入江、小灣、谿谷谷間の流を經る毎に煩はしきまでに質問を續ける。鼻薬をつけて貰つた馭者は大得意に説明の勞をおしまない。カランダまでの往復の一日は詩境にあつて詩懷の果を得難い哀さを數ぜしめたのは幾度であつたか。

【カトリン湖縦航】 ホテル前的小湖アグレイの湖畔に沿うて樹下のアスファルト道を行くこと一町ばかりにて埠頭に客待の汽船がある。琵琶湖の中型汽船である。吾輩が甲板上のベンチに坐を占めると白人等は一瞥をくれた後一齊に坐の隣接すること避ける。甲板上に見受けた印度人夫婦までが白人の眞似をする。兎でもあるまいが東洋東の威風あたりを拂

ふこと夥しい。やがて船はエレンの島を一周する美しきエレン嶺の隠れ家は今何處にある。エレンが白き腕に楳をとつた小舟スキフ(Skiff)の行衛は今尋づゐるに山がない。蘇國の豪族克蘭・グアナル(Clan Gregor)或は克蘭・アルバイン(Clan Alvine)の若者等が戦戈をとつて郷園を去つた不在中小供や婦女子を一所に集めたのもこの島であつた。郷土史に傳ふる處によれば比較的近代のグロムウエルの時代にその輩下の一兵士が婦人の漕ぐ舟を強奪せんと欲して却つて婦人の爲めに湖底の藻屑となつたのもこの小島の近くである。この女護の島には今日人影を見ることがなく只鬱蒼たる樹木の繁茂を見るばかりである。右手に白砂の濱を眺めつゝ船は波無き湖面を靜に渡る。この右岸の白濱こそエレンが優しき手で漕ぎ渡つた『銀の濱』である。湖岸を滑うて走る自轉車を見て失望するは餘りに無謀である。豚の生血をつけ火に焼いたアスプの樹枝を以て戰の準備を觸れ廻つたと詩に歌へる道をオート・バイで飛ばすのが普通である。今日では詩の讀者及び小説ロブROI(Rob Roy)の讀者のみが想像の世界を造り得る特權をもつて居る。右岸に見る山々の峽に茂れる樹木の陰こそは豪族の長ロテリツク・ゲュが部下の伏兵を忍ばせた處であらう。ロテリツクがフィツツ・セームスを送り出した山道を辿ることは今日の旅客には不可能な註文である。ベンベヌ(Benvenue)の高峯は左手西南の雲間に高く聳え、ベンアン(Ben An)の山は稍低く北に見えて居る。カトリン湖の面

積餘り廣からず長さ僅に十哩ばかり幅は一哩と云ふ小湖ではあるが圍繞する山岳は水に迫つて斷崖をなし谷間に流るる溪流は白布を處々に見せて居る。湖面の色暗雲を映じて鈍灰色を呈し、雲脚退く船の進行と共に展開する湖畔の村落點々として一幅の山水畫を作つて居る。左岸に怪賊ロブ・ロイの岩窟がある筈だとの説明を聞いて旅客の頭は詩から小説に立ち歸る。走る船は、豫定の如く、船着場のストロナツハラツハ(Sronachlachan)に着くと四頭立ての乗合馬車が幾臺か馬飾りを施し金色の盛裝嚴しき高帽の馭者は鞭を立て、客待ちをして居る。馬車は客を滿載して峽間を走る。谷間に見る二三軒の田舎小屋に十歳ばかりの小娘が白きハンカチを振り翳して見送る。

『ロツホ・ローモンド湖岸のインヴァスネイド』馬車はロツホ・ローモンド(Loch Lomond)湖の北部右岸にあるインヴァスネイド(Inversaid)にて客を下ろす。旅宿は只の一軒あるばかりである。旅宿の表近くの岸に立てば The Bonnie Banks of Loch Lomond と歌謠に歌はれた湖水を見て居るのである『いとしの人と別れて以來再びこの岸に来て見れば山には野の花が咲き樹の枝には小鳥が囀り水は陽光をうけて靜に眠を續けてある。然しこの身は胸に秘めたる悲みの遣る瀬なき』とて歎き『お前は岸の上手の道、妾は下手の道なとつてローモンド岳の峻しき山腹で人目を避ける谷間に落ち合はうと誓も仇の夢、想を懸けし君は戰の庭の露と消えて居るとありし昔を悲しむ歌心を味ふ可き湖畔に佇立する

こと暫である。さりとて詩の心を共鳴して吾が心を傷めるには既に不惑の年を超え、故國に遣せし妻子を忍ぶには對蹕國の遠さである。彼等は同じ月影を眺め同じ空を仰いで居るであらうと想像するには餘りに地球觀念が無過ぎる。またさりとて一軒家の旅宿に泊つて獨り旅の氣樂さを只獨り樂しむには餘りに寂寥である。湖水を縱斷して早くグラスゴ市に出づるがよいが、旅の疲れを一旦休めて蘇國の北部奥地に走るがよいが、相談す可き道伴れも無い。インヴァスネイドの埠頭に立つて思ひ煩ふ頭を片手に支へ埠頭の垣に身を倚せて思案に耽ける。文學研究者にとつてお馴染の詩人ウィリアム・ウラーズワース(William Wordsworth)は妹のドロシイ(Dorothy)と詩友のコレリツヂ(G. T. Coleridge)を伴つて此處まで來た。その日は生憎雨天であつたのでコレリツヂは佛然色をなして故郷に立ち去つた。詩人コレリツヂを眞似れて立ち去らんにも吾は歸る可き家をもたぬ身である。幸にも天候は快晴である。ウラーズワースと妹とは宿に泊つた宿には美しい人を魅する小娘が居つた。詩人は小娘の魅力に詩泉を沸騰せしめた。詩人は同伴の妹の手前と相手が餘りにおぼこであつた爲めにまたありし昔佛蘭西での艱事を繰り返へさなかつた。然しながらこの時作つたウラーズワースの詩は後世まで遣つた『萬地の娘』と題する詩がそれである。『靜かなる庭の芝生、木の芽萌え出でんとする樹木、沈黙の湖水のほりにと囁きの聲を立つる瀧の音、小さき入江、靜かな山道を家の周圍にもつ小娘の宿の靜けさは麗はし小娘と

共に年老いても吾が記憶に遺る』とは詩人の印象であつた。

詩に歌はれた小娘が居るか、と宿の食堂を覗く。愛嬌よき給仕女は居つても詩に見るやうな小娘は居らない。生憎宿は先約の旅客によつて満員であると云ふ。宿無しの心細さはたとしへがない。さりとて見る可きものなも見ずして旅先を急ぐは悔を遺すと考へ、糞度胸を据えて悠然と裏の溜壺に至り更に附近の岩窟に行く。

岩窟にあつては詩の連想が近代から中世に遡る。蘇國中世の國王ローバト・ブルース (Robert Bruce) のことは既に幾度か述べた。ブルース王は信賴する股肱と共に戦敗の身を湖畔のこの地に寄せたが、乗り逃ぐるホートも無く渡りの綱も無い。進退谷まつて岩窟に一夜を過さんとした。夜半不思議なる呼吸の息音を聞き敵軍襲來に非らずと恐れ、燭をとつて熱視すればそれは人間に非らず山羊の群であつた。翌朝主従三人破れ小舟に乗り二人は洩れ入る水をかへ出し一人は漕いで辛じて對岸に逃れ得た。王はこの時の記念の爲めに後日山羊飼養者に課税を免じたと云ふ。バーバ (Barbour) の史

詩にあるインヴァスネイドの岩窟は鎌倉の大塔宮の土牢に似たものがある。

連想の糸は詩から散文に再び戻る。度々舉げしスコットの小説の主人公ロアロイ (Rob Roy Macgregor) も亦インヴァスネイドに劍劇的な逸話を傳へて居る。俠賊ロア・ロイの侵略に備へる爲めにモントローズ (Montrose) 大公は時の政府をして此地に城寨を築かした程であり城守の一人は後日クエベック (Quebec) の征服者として英國殖民史上に名を垂れて居る。それは兎も角として、スコットの小説によればロアロイは此處の埠頭に同族の一人を見送り地獄一つ踏み鳴らして『俺にキヤムベル族の名を冠らしめるな、俺をミスタ呼ばはりもするな、俺の足は生れ故郷のヒースの草原の上にあり俺の族姓はマクグレネルだ』 (Don't Campbell, me or Mister me; my foot is on my native heath and my name is Macgregor) と豪語してゐる。吾が名は『鎮西八郎爲朝で可なり』と云つた嘆阿の切り方そつくりである。

#### 地球第十一卷第四號

二八三頁 上段八行目

二八三頁 上段二行目

二八五頁 上段最後より二行目

正 誤  
黑 墨  
灰 水  
拉 拉